

雲雀山

世阿弥作

男 姫の従者

シテ 乳母侍従

子方（姫） 中将姫

ワキ 横佩豊成

トモ 同従者

地は 大和

季は 四月

男詞

「かやうに候ふ者は。奈良の都横佩の右大臣豊成公に仕へ申す者にて候。さても姫君を一人御持ち候ふを。さる人の讒奏により。大和紀の国の境なる。雲雀山にて失ひ申せとの仰せにて候ふ程に。是まで御供申して候へども。如何にして失ひ申すべきと存じ。柴の菴を結び兎角いたはり申し候。さる程に侍従と申す乳母。春は木々の花を手折り。秋は草花を取りて里に出で。往来の人に是を代なし。

シテ詞

彼姫君を過し申し候。今日も侍従を呼び出だし。里へ下さばやと存じ候。如何に申すべき事の候。

「何事にて候ふぞ。

男

「今日も又里へ御出で候へ。

シテ

「さらば姫君に御暇を申し候ふべし。

男

「やがて御暇を申し里へ御出で候へ。

シテ

「如何に申すべき事の候。今日も里へ出で、やがて歸り候ふべし。

姫サシ

「実にや閑窓に煙絶えて。春の日いと暮し難う。

シテ

「弊室に灯消えて。秋の夜猶長し。家貧にしては親知少く。賤しき身には故人疎し。親しきだにも疎くなれば。

下歌地

「よそ人はいかで訪ふべき。

上歌

「さなきだに狭き世に。く。隠れ住む身の山深み。さらば心の有りもせで。唯道せばき埋草。露いつまでの身ならまし。く。かくて煙も絶えぐの。

く。光りの陰も惜しき間に。よその情を頼まんと。草の肩を引きたてゝ。又里へこそ出でにけれ。く。
(中人)

ワキ次第

「傾く嶺の雲雀山。く。上るや雲路なるらん。

詞

「これは横佩の右大臣豊成とは我事なり。

一同

「それ狩場は四季の遊びにて。時折節の興を増す。

歌

「梓の真弓春くれば。く。霞む外山の桜狩。雨は降り来ぬ同じくは。濡るとも花の木陰に宿らん。

さて又月は夜を残す。雪には明くる交野の御野。
禁野につづく天の川。空にぞ雁の声は居る。く。
シテサシ
「五月待つ花橘の香をかげば。昔の人の袖の香ぞす
る。

詞
「実にや昔も君の為め。故ある木の実を集めつゝ。
常世の国まで行きしぞかし。我も主君の御為めに。
色ある花を手折りつゝ。葉末に結ぶ露の御身を。
残しやすうと思草。いろくの。頃を得て。咲く

卯の花の杜若。

地
「紫染むる山草の。

シテ
「色香にめでて花めされ候へ。

地
「月は見ん。月には見えじながらへて。く。憂き
世を廻る影も羽束師の。森の下草咲きにけり。花
ながら刈りて売らうよ。日頃経て。待つ日は聞か
ず時鳥。匂ひもとめて尋ねくる。花橘や召さるゝ。
く。

トモ詞

「如何に尋ね申すべき事の候。其花をば何の為に持ち給ひて候ふぞ。

シテ詞

「さん候是は故ある人に参らせん為めに持ちて候。いづれにても候へ色香にめでゝ召され候へ。花檻前に笑んで声いまだ聞かず。鳥林下に鳴いて涙尽き難し。実にも尽きぬは花の種。色々なれや紅は。いづれ深百合深見草。御心寄せにめされ候へとよ。

トモ

「実に面白き売物かな。さて其花を売る事は。分き

て謂のあるやらん。

シテ

「あらむつかしと御尋ねあるや。召されまじくは御心ぞとよ。

地

「色々のく。人の心は白露の。枝に霜は置くとも。猶常磐なれや橘の。目覚草の戯ふれ。其方の身には何事も。包む事はなくとも。来し方なれや古へをも。忍草を召されよや。忍草を召されよ。

シテ

「朝もよい。

地 「朝もよい。紀の関守が手束弓。入るさか帰るさか。

何れにてもましませ。などや花は召されぬ。あら
花すかずの人々や。花すかぬ人ぞをかしき。

トモ詞

「さらば此花を買ひ取り候ふべし。又御身の来しか
たを懇に御物語り候へ。

シテ

「春霞。立つを見捨て、行く雁は。

地

「花なき里に住みや習へると。心そらなる疑ひかな。

シテサシ

「歎冬あやまつて暮春の風に綻び。

地

「又躑躅は夜遊の人の折を得て。驚く春の夢の内。

胡蝶の遊び色香にめでしも。皆是れ心の花ならず
や。

シテ

「実に面白き優花の友。

地

「春の心や惜しむらん。

クセ

「思へ桜色に。染めし袂の惜しければ。衣更へ憂き
今日にぞ有りける。そのみかいつしかに。春を
隔つる杜若。いつ唐衣遙々の。面影残るかほよ鳥

の。鳴きうつる声まで。身の上に聞くあはれさよ。
斯くてぞ花にめで。鳥を羨む人心。思ひの露も深
見草の。茂みの花衣。野を分け山に出で入れども。
さらに人は白玉の。思ひは内にあれど。色になど
や顯はれぬ。

シテ

「さるにても。馴れしまゝにていつしかに。

地

「今は昔に奈良坂や。児の手柏の二面。兎にも角に
も故郷の。よそめになりて葛城や。高間の山の嶺

続き。こゝに紀の路の境なる。雲雀山に隠れ居て。

霞の網にかゝり。日路もなき谷陰の。鴟の草ぐき
ならぬ身の。露に置かれ雨に打たれ。斯くても消

えやらぬ。御身の果ぞ痛はしき。遠近の。
(中の舞)

シテ

「遠近の。

地

「たづきも知らぬ山中に。覚束なくも呼子鳥の。雲
雀山にや待ち給ふらん。いざや帰らん。く。

ワキ詞

「やあ如何に御事は乳母の侍従にてはなきか。豊成

をば見忘れてあるか。さても我姫よしなき者の讒奏により失ひしかども。科なき由を聞き後悔すれども叶はず。まことや御事が計ひとして。此雲雀山の谷陰に。柴の菴を結び隠し置きたるとは聞きしかども誠しからぬ所に。今御事を見てこそさはと思へ。姫は何くにあるぞ包まず申し候へ。

シテ詞

「是は仰せとも覚えぬものかな。人のかごとを御用ひありて。失ひ給ひし中将姫の。何しに此世にま

しますべき。如何に御尋ねありとても。

地

「今は御身も夏草の。茂みに交じる姫百合の。知られぬ御身なり。何をか尋ね給ふらん。

ワキ詞

「実にくそれはさる事なれども。先非を悔ゆる父が心。涙の色にも見ゆらん物を。はや有りどころを申すべし。

シテ

「まこと左様に思し召すか。

ワキ

「中々諸天氏の神も。正に照覧あるべきなり。

シテ「さらば此方へ御出であれと。其処とも知らぬ雲雀

山の。草木を分けて谷陰の。葉を道に足引の。

地「山ふところの空木に。草を結び草を敷きて。四

鳥のねぐらに親と子の。思はず帰り逢ひながら。

互に見忘れて。唯泣くのみの心かな。実にや世の

中は。定めなきこそ定めなれ。夢ならば覚めぬ

まに。はや疾くく和有りしかば。乳母御手を

引き立てゝ。御輿に乘せ参らせて。御悦びの帰る

さに。奈良の都の八重桜。咲きかへる道ぞめでた

き。く。